

## 海外における日本語読解教材の役割

—韓国語学習者のための読解教材の作成プロセスへの記述と共有—

The Role of Japanese Reading Comprehension Textbooks in Foreign Countries:  
Describing and Sharing the Process of Making a Reading  
Comprehension Textbook for Korean Learners

金義泳(早稲田大学大学院生)・趙南星(ハンバット大学)・田中祐輔(早稲田大学大学院生)  
飯塚知子(筑波大学大学院生)・川端祐一郎(郵便事業株式会社)

KIM EuiYoung (A graduate school student of Waseda University),

CHO Nam Sung (Hanbat National University),

TANAKA Yusuke (A graduate school student of Waseda University),

IIZUKA Tomoko (A graduate school student of University of Tsukuba),

KAWABATA Yuichiro (JAPAN POST SERVICE Co.,Ltd.)

### 要 旨

「批判的に読む」活動を促すような日本語読解教材が、韓国には不足している。今回、その不足を補うべく開発した教材では、36の「名言」を取り上げ、その言葉の意味や背景を説明する文章と、それを批判的に読ませるための3つのしかけを用意した。本稿では、「批判的に読む」活動に「名言」という題材を利用することの意義、本教材の各コンテンツが果たす役割、そしてそれらコンテンツの作成過程について述べる。

Japanese reading comprehension textbooks that promote activities that help learners "read critically" are insufficient in Korea. To make up for this insufficiency, we have developed a textbook that contains 36 selected wise remarks and essays that explain the meaning and background of those remarks. Also, three types of devices are provided to help learners "read critically". This report will state the significance of using "wise remarks" for the purpose of "reading critically" and the function that each part of this textbook carries out as well as the process of forming the contents.

【キーワード】教材作成プロセス、読解教材の役割、批判的に読む、名言、言葉への共感

### 1. はじめに

本稿の目的は、今年8月に韓国で出版された『메이겐 독해 일본어』(『名言読解日本語』)<sup>(1)</sup>の作成プロセスを記述すること、そして韓国での読解教育において本教材が果たす役割を示すことである。

### 2. 教材作成の背景

本教材は、韓国の中上級から上級の日本語学習者を対象とした読解教材である。まず、教材作成に着手するに至った経緯について述べる。

#### 2-1 動機

日本の名言を題材にした教材を作成するという着想の源は、著者たちが個人的に好んで収集していた名言を「教材化してみたい」という素朴な思いであった。名言という良き言葉に心惹かれるという気持ちは、誰しも持ったことがあるだろう。そうした気持ちを利用した読解教材を作成できれば、学習者にとっては学習の良い動機付けとなるだろうし、無味乾燥な言語情報の詰め込みではなく、言葉の意味を深く味わい、さらにはそれを活かしたコミュニケーションを行うというような、生き生きとした言語習得を促すことになるであろう。

作成チーム内で検討を重ねる中で、「日本語教育」という目的に引き寄せて名言の持つ特徴を考えてみると、以下の3点が浮かび上がってきた。

- (1) 言語表現としての「面白さ」
- (2) 言葉やそれを残した人の人生への「感動・共感」
- (3) 言葉の背景にある「日本事情・日本文化」

こうした特徴をもつ名言には、たとえば「歌舞伎」「相撲」「着物」のような、型にはまった「日本文化」の紹介にとどまらない魅力がある。この魅力を利用すれば、従来の教材には無かったような生き生きとした日本事情を、学習者に伝えられるのではないかと考えた。

この教材で目指したことは、学習者の文化と日本文化の間の「差異性」ではなく、「共通性」に焦点をあて、彼らの関心を引くような教材を構想するということである。従来の日本語教育は、日本文化の特異性・特殊性を紹介し、外国の学習者から見た「ものめずらしさ」や「異国情緒」に訴えるような文化紹介に偏重してきたきらいがある。少なくとも韓国においてはそのような傾向がある。そのようなものも一概に悪いとは言えないが、「型にはまった情報提供」だけではなく、「言葉に対する共感」という観点も盛り込むことが重要であると考えた。その点において、名言の魅力は、日本語の特殊な価値観に彩られていることではなく、その含蓄が学習者の心にも響きうるものであり、その役目を果たすと考えられる。

## 2-2 背景—韓国における日本語読解教育の現状

一方、韓国で使用されている読解教材の現状を見てみると、次のような事情があることが判明した。国際交流基金(2008)によると、韓国は日本語学習者数が約91万人ともいわれ世界随一で、使われている日本語教材の数も非常に多い。中には優れた教材もちろん存在するのだが、教材の内容は充実しているとは言い難く、読解教材について言えば中上級読解教材が不足している。

また、윤복희(2001)では、韓国で使用されている中上級者向けの読解教材の多くは、「予習⇒翻訳⇒語彙・表現の確認」といった型通りの構成を取っているという。したがって、文章の書き手の意図を吟味したり、行間にあるメッセージを想像したりするような機会を学習者に与えるものにはなっていない。また、たとえ教師自身が批判的に読む活動を意識して、市販の教材に頼らずに新聞や雑誌の記事などの生教材を使って授業を展開しようとしても、結局は既存の教材と似たり寄ったりの読解活動に終始してしまうか、も

しくは、教師自身の文化的素養の乏しさや知識不足などによって、十分な理解と考察を導き出せずに終わることが多いようである。

### 3. 本教材の目標と「名言」

以上の動機と背景から、韓国の日本語読解教材の不足点を補うための教材開発を行うこととした。先に、韓国の読解教育は翻訳活動や、語彙・文法の習得に偏重したことが多いことを指摘したが、本教材が目指している読解教育はそれだけではなく、以下のような「批判的に読む力」を中心とした読解活動の実現である。

- (1) 「批判的に読む力」(3-1参照)を養うこと
- (2) 日本事情や日本文化との出会いを通して、自文化を振り返り再認識すること
- (3) 学習者が自らの言語文化と改めて対話する機会を得ることを可能にすること

#### 3-1 「批判的に読む力」とは

河野(2005)は、文章に表れている筆者の世界観に触れることを通じて、「自分ならどう捉え、考えるのか」という学習者なりの物の見方や考え方を形成し、さらにはそれを他者に伝えるための述べ方を工夫していくことが、「批判的に読む力」の養成につながるという。言い換えれば、「自分なりの観点や目的」を持って読解に取り組むことによって、文章の内容や書き手の意見・価値観を掘り下げて理解するとともに、その文章を自分自身に関連付けて味わうことが可能になるのである。

本教材においては、「批判的に読む力」を、「他者の考えを自分なりの観点を持って理解し、自分の考えを形成し、その考えを他者に伝える力」と定義し、その育成に資することを目的として教材を開発した。

#### 3-2 「批判的に読む力」と「名言」

本教材で取り上げた名言は、歴史上の偉人達の人生観や哲学が凝縮された、いわゆる格言や、現代を生きる人々のリアルな心情が表現された流行歌の歌詞など、さまざまである。そこには、読み手に感動と共感を与え、思考を促すような要素がふんだんに含まれている。

また、名言というものはその時代の文化を背負って発せられた言葉である。つまりその言葉には、名言を述べた人物の人生や思想のみならず、その背景にある社会的・文化的な事情がよく表れてもいる。

このような名言を題材にすれば、筆者の人格や思想(あるいはその背景にある社会・文化)と出会い、また読者がそれを能動的に解釈することによって、自文化を振り返り再認識するような活動も可能になると考えられる。これは、言語の習得と思考の発展とを同時に達成するという豊かな読解学習につながるものであり、「批判的に読む」活動そのものである。

こうした理念に基づき、また上記のような韓国の読解教育の現状を踏まえて、名言を通じて「批判的に読む力」を養うことができるような教材を作成し、韓国における読解教材の供給および教室活動を支援することを目指した。

#### 4. 「批判的に読む力」の養成を目指した読解教材の作成と構成

##### 4-1 教材の内容に影響を与えた意見

作成プロセスの第一段階として、上に述べたような名言の面白さと、韓国の読解教育・読解教材の現状を踏まえて、まず3課分の試作版教材を作成した。その試作版を用いて、2007年9月に韓国の中上級の日本語学習者（大学院生）6名と教師2名の協力を得て試用調査を行った。

試用者からは、「名言で一体何を学ぶのか」、「学生には面白く、教師には教えやすく作成したほうがよい」、「名言という素材を活かしているのか」といった指摘が寄せられた。これらを踏まえ、「読解教育に関する理念をいかに確立するか」、「名言という素材を最大限に活かす方法とは何か」、「批判的に読む活動をどう取り入れるか」といった課題に取り組むこととなった。なお、上に述べた「批判的に読む力」の理念は、こうした指摘に促されて形成されたものである。

その他、執筆協力者たちや出版社とのやり取り、あるいは実践研究フォーラムに向けて行った本教材の作成プロセスの反省からも、教材の内容の企画に関する前向きな刺激を得ることができた。

##### 4-2 課の構成——「批判的に読む力」の養成のためのしかけ

下に掲載しているのは、上記のような作成コンセプトを踏まえて作成した各課の構成図（課の構成要素の関係図）と、各構成要素の作成意図をまとめた表である。

図1 各構成要素の関係

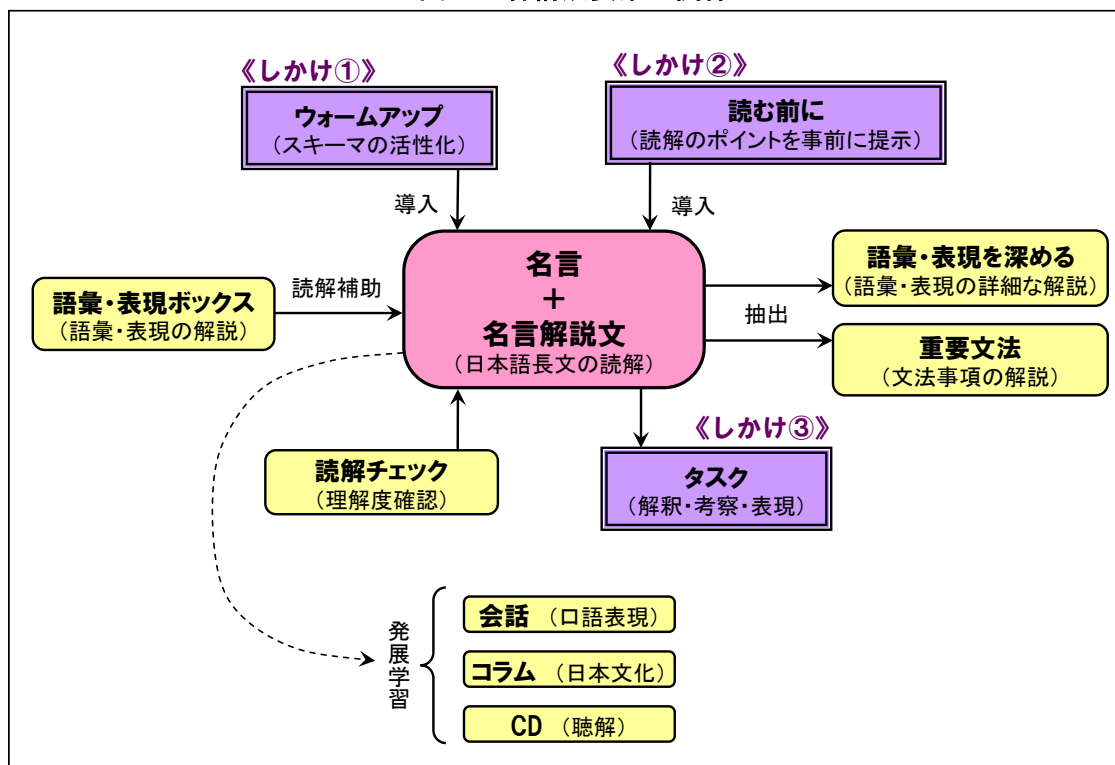


表1 各構成要素の作成意図

項目	作成意図
ウォームアップ	課に取り組む前に、学習者の持つスキーマを活性化させ、これから読む内容をイメージさせる。
読む前に	解説文を読む前に、どういったところに注目して読むかをあらかじめ示し、それを探しながら読み進めることを可能にする。
名言の簡単な説明	名言の意味を簡単に言い換え、理解しやすくする。
名言解説文のタイトル	解説文のタイトルから内容を連想させ、内容理解を助ける。
名言解説文	名言の意味、時代背景、名言を述べた人の生き方・考え方を盛り込んだ文章。
読解チェック	問題を解き、解説文の内容を理解できたかを確認する。
語彙・表現ボックス	教材の対象者に必要な日本語能力試験1級相当の語句とその韓国語訳を与え、意味の確認を行う。
語彙・表現を深める	解説文中に出てくる語句の中で特に重要なものに対して、意味の説明・例文を与え、使用方法の理解を深める。
重要文法	対象学習者が身につけるべき文法事項（日本語能力試験1・2級）を取り上げて、意味とその用例を与える。
会話	若者たちが名言を実際に使った会話や、名言を話題とした会話を提供し、学習者は名言をより身近に感じ、考えを深める。
タスク	名言や解説文の内容を自ら発展させて他者に伝えるという課題を与え、思考力と語学力の両面を通して、課のまとめを行う。
コラム	名言や解説文に関連する日本事情を簡単に紹介し、名言とは違った側面から、日本語や日本文化に触れる場を提供する。

上の図1・表1の通り、この教材は「名言＋名言解説文」を読解のベースとして、そこに「批判的に読む力」を養成するために3つの“しかけ”を用意している。これらは、教材作成にあたってとくに注意を払った部分でもある。以下、これらの構成要素の作成プロセスについて、実際に作成した順序に従って記述していく。

#### 4-2-1 名言解説文

##### ①名言一選定の方法と基準—

本教材で取り上げる名言は、名言を発した人物が日本国内（あるいは海外）で広く知られた日本人であるか、あるいは無名であっても広く知られた物事と関係のある日本人であることを条件として、解説文執筆者が選定した（全36課中28課は、著者以外の執筆者に協力を依頼した）。その際の参考として、事前に著者で100の名言を選び、韓国の日本語主専攻の学生にアンケートを行い、彼らが学びたいと思い、共感できる名言を抽出して、リストにした。解説文執筆者が選定した名言には、このリストから選ばれたものと、執筆者が独自に選んだものの両方が含まれている。

名言の選定にあたっては、解説文執筆依頼の際に選定条件をさほど厳密には定めていなかったため、執筆者が選んだ名言には、あまり広くは知られていないものも混ざっていた。それは解説文執筆者の中でのみ名言として響いているものであるといえる。しかし、そう

した名言の方が、書き手が気持ちを込めて文章を執筆できることも確かであるため、最終的には各執筆者の意向を尊重することとした。

また、内容に多様性を持たせて学習者の興味を引く教材にするため、名言はさまざまなジャンルから選択してもらうこととした。最終的に、ジャンルは文学、歴史、スポーツ、音楽、アニメ・マンガ、映画、経営者、学者の8つで、合計36の名言を取り上げるようになった。

学習者が名言そのものの理解で躓いて解説文に進めないといったことがないように、古語や難解な表現を含む名言については、内容を平易な日本語で説明する文を添えることとした。例えば下記のような例がある。

例)

《名言》

おのれに存する偉大なるものの小を感じることのできない人は、他人に存する小なるものの偉大を見のがしがちである。(岡倉覚三 著・村岡博 訳『茶の本』岩波文庫)

《説明》

自分の持っている偉大なものが、本当はいかに小さなものであるかを感じることができない人は、他人の持っている小さなものが、本当はいかに偉大なものであるかを見逃しがちである。

『名言読解日本語』第2巻/第14課/p.140より

②解説文

①の名言を解説する文章を執筆し、教材の柱に据えることにした。この解説文は、学習者が様々な文章に触れられるよう、多様なジャンルから名言を選ぶことと同時に、様々な世代・職業の日本語母語話者(大学生や大学院生、高校や大学の教員、日本語教師、会社員、編集者、企業の経営者など)に執筆してもらうこととした。結果として、執筆者の専門性、興味、経験を活かした多様な文章を供給することが可能になったと言えるであろう。解説文の執筆を依頼する際に、執筆者に文章に盛り込むよう頼んだことは、下記の4点である。

- (1) 名言を発した人物の紹介
- (2) 名言が発せられた理由
- (3) 名言に関係する社会の諸相・歴史
- (4) 筆者なりの解釈

上記のように、解説文には、名言を述べた人物の紹介に加えて、その社会的・歴史的背景や、その言葉が名言とされている理由などを盛り込むこととした。そして、執筆者が共鳴し、感銘を受けた名言の素晴らしさを日本語学習者に語りかけるような文章とし、学習者自身がその名言について自分の考えを持つきっかけを与えるよう心がけた。

また、執筆者それぞれの持つ豊かな言語感覚を生かすため、あえて「教材用」に必要以

上に易しくした日本語ではなく、執筆者が日常的に使っている日本語で執筆してもらうようお願いした。

書き下ろしの解説文が集まった段階で、編集作業を行った。具体的には、内容の妥当性や論理性、文章の難易度が適切か否かを判断し、必要に応じて別の言葉に書き換えたり、対象学習者のレベルに合った文法事項を挿入したりした。また「批判的に読む」という活動が円滑に行えるような読解用文章となるよう内容を調整した。例えば、下記のような例がある。

例)

**【書き下ろし解説文の初稿】**

しかし、チロルの教会で西洋の音楽が東洋人の小澤の心を打ったのは事実であるし、我々が日本で生活する中で西洋音楽に感銘を受けるのも珍しいことではない。

**【書き下ろし解説文の修正稿】**

我々が日本で生活する中で、西洋音楽に感銘を受けるのが珍しくないことはもちろん（文法事項の挿入）、チロル教会で西洋の音楽が東洋人である小澤の心を打ったことも事実なのだ。

『名言読解日本語』第2巻/第2課/p.22より

編集作業において注意したのは、著者全員が、すべての原稿に必ず目を通すということである。「韓国人学習者・韓国人教師の目」、「日本語教育に携わる母語話者の目」、「日本語教育には直接関わっていないが、文章の執筆・編集に慣れている母語話者の目」という「3つの目」を通じて、教材の質を多角的に検討し、高めていく必要があるからである。

#### 4-2-2 《しかけ①》ウォームアップ

解説文を読むことや、読解問題・タスクに取り組むことは、読解活動の中心的要素である。しかし、目的を持って文章の内容を読解することに慣れていない学習者は、スムーズにそれらを実行できない可能性もある。

そこでまず教材が支援できることとして、読解用の文章を読む前に、その内容と関連する情報を与えたり、学習者のスキーマを活性化させたりすることを考えて、「ウォームアップ」を設けることとした。読むことへの興味を引き出し、その後の理解を促進させるためのしかけである。

ウォームアップの作成手順は、まず名言と解説文の内容からテーマやモチーフを抽出し、それをもとに学習者同士で話し合いができるような課題を作成した。その後、教材の全体を見渡しながら著者間で再検討を行い、加筆修正や、ときには抜本的な再考を繰り返しながら完成させていった。作成にあたり注意した点は下記のとおりである。

- ・ どの学習者の経験にも結びつけられるような普遍性のある発問を心がけたが、一方であまりに漠然としたものでは教室活動が活性化しないため、具体的に「何を」「どうやって」話し合うかについて明確にすることに努めた。

- ・ 読者への指示文は、日本語の語彙や文法の習得不足によって学習者の考えが妨げられたり、考えを述べにくくなったりしないように、難解な語彙・文法の使用を避け、構造も単純な文章になるように努めた。

ウォームアップ 例)

これまでに見たことのあるアニメや漫画の中には、どのような人物が登場していましたか。印象に残っているキャラクターについて、思い出してみましょう。その人物の持つ魅力、性格、際立って見える個性はありましたか。グループで紹介し合ひましょう。

『名言読解日本語』第1巻/第8課/p.80より

#### 4-2-3 《しかけ②》読む前に

「ウォームアップ」の後に文章を読解していくという構成になっているが、さらなる支援として、文章を読む態勢に入っていくところで「何に注目して読むか」を予め提示する必要があると考えて「読む前に」を作成した。読むポイントが事前に決まることで、全体の文脈を読み取りながら、自分の必要とする情報を意識的に探すことができるようになるからである。「読む前に」の作成にあたっては、以下のような点に注意した。

- ・ こちらで提示した観点から本文を読解することによって理解を促すことを目指しているので、解説文本文中の瑣末な部分を問うものではなく、主要なポイントを押さえられるような問いにする。
- ・ 本文のポイントをつかむために作成された「読む前に」は、結果として「読解チェック」と類似・重複してしまいがちだったので、「読解チェック」は比較的細かな内容に踏み込んだ問題とし、「読む前に」は大まかなポイントを探せるような問題として区別した。

読む前に 例)

- ①欧米の軍艦が来るようになり、日本国内はどのような状態になりましたか。14字で抜き出しなさい。
- ②「騎兵隊」はどのような軍隊ですか。
- ③筆者は、「人生の醍醐味」は何であると述べていますか。

『名言読解日本語』第1巻/第12課/p.120より

#### 4-2-4 《しかけ③》タスク

「批判的に読む力」というものは、予め読解の目的を持ち、ポイントを押さええていたとしても、単に文章を読むだけで養えるものではない。そこで、「批判的に読む」活動をさらに進めるために「タスク」を設定した。これは単純な翻訳作業や語句の暗記にとどまらず、解説文をきっかけにして思考を深めることを促すような課題である。

課全体のまとめとして、その課で学んだことを総合的に発揮しつつ、自分自身の考えを形成し、それを他者に伝える。そしてそのコミュニケーションを通じて得られたものについて、再び考えるという過程を通して、「自分とは」という課題に向き合うことができるものを目指した。



なお、タスクの内容は作成過程で大きく変更することになった。当初、名言という題材にこだわるあまり、課の内容に関連する名言を調べ、その意味を説明する文章を自分で書くという形式のタスクに終始していた。例えば以下のようなものである。

当初のタスク 例)

**あきらめない気持ちが現れている日本語・韓国語の名言を探しましょう。**

しかし、「それだけでは単調になってしまうのではないか」、「考え、他者に伝えるという能力の養成ができるのか」という疑問が生じたため、課の内容を踏まえた上で総合的に力を発揮できるような活動をタスクとして設定すべきだろうという考えに至った。最終的には以下のような点に注意して、タスクを設定した。

- ・ 単なる情報の伝達ではなく、他者とのやりとりによって考えが深まったり、変化させられたりするようなダイナミックなコミュニケーションを実現できるものとする。
- ・ 名言だけを話題にしたタスクにとどまらず、名言と解説文の内容をきっかけとして学習者の知的好奇心を強化し、さらに話題が広がる内容にする。
- ・ タスクで書いたり、考えたりしたことを、他者とのコミュニケーションのなかで表現し、相互理解・共有につなげられるようなものにする。

具体的には、下記のようなタスクを設定した。

最終的なタスク 例)

今までの生活の中で、何かに失敗したり、壁にぶつかったりしたことはありますか。その時のことを思い返してみましよう。

- ・ それはいつのことですか。 \_\_\_\_\_
- ・ どのようなことですか。 \_\_\_\_\_
- ・ どんな感情になりましたか。 \_\_\_\_\_
- ・ どのようなことを考えましたか。 \_\_\_\_\_
- ・ その状態はどれくらい続きましたか。 \_\_\_\_\_

また、あなたは具体的にどんなことをして、その状況から抜け出しましたか。そして、その失敗体験とそれを克服した経験は、今のあなたにどのように影響していますか。以上のことを書き出し、グループで話してみましよう。

『名言読解日本語』第1巻/第17課/ p.179より

## 5. おわりに

上記のとおり、『名言読解日本語』の作成プロセスを記述してきた。現在、韓国における読解教育に必要なことは、文法・語彙の暗記や単なる翻訳活動に偏重した読解活動を見直し、「読む」という活動から「考える」「伝える」といった活動へ広げていくような読解活動を実践することの重要性を、学習者と教師の双方が認識することである。本教材が、そうした問題提起の一つの形として、受け入れられれば幸いである。

今回の「実践研究フォーラム」に参加して改めて痛感したのは、日本語教育を実践する者が、自らの活動のプロセスやその意義を記述し、他の実践者たちと情報を共有することの重要性である。特に教材作成者は現場の教師に対して、「教材作成の意図」を明確に説明しなければならないということに気づかされた。

教材開発の初期段階で、サンプル版を作成して韓国の学生に試用してもらった際には、教材のコンセプトがさほど明確ではなかったため、得られた意見も大まかな感想程度のものであった。しかし、本フォーラムで教材作成者としての意図やコンセプトを説明した上で参加者から得られた意見は、非常に鋭い指摘に満ちていた。その一つ一つをここで紹介する余裕はないが、参加者の中には豊富な現場経験を持つ方が多数おられ、多くの示唆に富むご意見をいただいた。

この貴重な機会を通じ、教材開発への今後の課題と展望を得ることができた。この場を借りて、主催者、参加者の皆様に心より感謝申し上げる。

#### 注

- (1) 趙南星・金義泳・田中祐輔・飯塚知子・川端祐一郎 (2008) 『메이겐 독해 일본어』 1・2 (『名言読解日本語』 1・2) 다락원 (タラグオン社)  
なお本教材は、著者であり本発表者である5名の他にも、後ほど説明する「名言解説文」の執筆協力者をはじめとして、多くの方々の協力を得て作成されたものである。

#### 参考・引用文献

- (1) 池田玲子・舘岡洋子 (2007) 『ピア・ラーニング入門』 ひつじ書房
- (2) 岡倉覚三 著・村岡博 訳 (1961) 『茶の本』 岩波文庫
- (3) 河野順子 (2005) 「『批判的読み』によることばの学び」『ことばの遊び』7, 三省堂, 28-31
- (4) 国際交流基金 (2006) 『国際交流基金教授法シリーズ7 読むことを考える』 ひつじ書房
- (5) 国際交流基金 (2008) 「『海外の日本語教育の現状-日本語教育機関調査・2006年- (概要)』 凡人社
- (6) 国際交流基金 (2008) 『国際交流基金教授法シリーズ14 教材開発』 ひつじ書房
- (7) 島田徳子・柴原智代 (2005) 「日本語教材作成のための三つの視点」『国際交流基金日本語教育紀要』1, 国際交流基金, 53-67
- (8) 趙南星・金義泳・田中祐輔・飯塚知子・川端祐一郎 (2008) 『메이겐 독해 일본어』 1・2 다락원
- (9) 山下早代子・小川貴士 (1998) 「読解教材の開発」『ICU 日本語教育研究センター紀要』7, 国際基督教大学日本語教育研究センター, 35-39
- (10) 윤복희 (2001) 「일본현대소설을 활용한 일본어교육-중급독해 수업사례-」 『일본학보』 한국일본학회, 575-583